



JSPS LONDON  
OFFICE

# NEWSLETTER

No.79  
2025 Winter

## Contents

Page 01 センター長・副センター長挨拶

Page 02 巻頭特集 1: センター長の英国雑記 “Trick of the Tail”  
量子科学100年に想う「電子よ、どうか誰の役にも立ちませんように」

Page 06 巻頭特集 2: 第7回英国サバイバルセミナー開催報告

Page 09 Pre-Departure Seminar開催報告

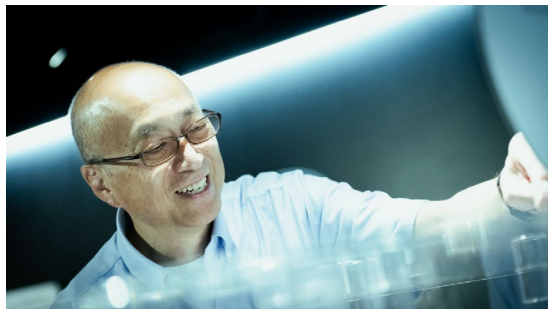
Page 11 山田さんの徒然なるままに

Page 13 ぼりーさんの英国玉手箱

Page 14 JSPS London Recent Events



## センター長・副センター長挨拶



JSPS London センター長 原 正彦（2025年5月就任）

今年2025年5月に着任しました原正彦と申します。どうぞよろしくお願い致します。

私は長年、理化学研究所(理研)や東京工業大学(現東京科学大学)で、物質科学の研究に従事して来ました。特に理研では、着任直後に国際共同研究のプロジェクトが立ち上がり、終了までに200名を超えるポスドクを迎える機会に恵まれ、その半数が海外からの研究者であったという多国籍研究チームの運営を通じて、貴重な経験を積むことが出来ました。またそれと並行して、国際連携の名の下で多くの様々な機会を頂きました。例えば、キューバの科学技術担当であったカストロ氏と親しくさせて頂いたり、麻生元総理の韓国訪問に際して、当時ソウルにありました連携研究センターの視察調整とアテンドをするなど、数え切れないほどの経験をさせて頂き、それらの全てが、今の自分につながるconnecting the dotsになっています。

英国とのご縁は学生時代に遡ります。大学を1年間休学して、当時の文部省から奨学金を頂いて、マンチェスター大学で新設研究室の立ち上げや、伝統的なドミトリでの生活を体験したりしまして、自分が何も分かっていなかったことを痛感した経験が、英国への憧れと再訪への思いを決定づける契機となりました。それから半世紀近くが経ち、英国・欧州そして日本の科学技術や研究環境に対して様々な思いがあり、今回このような機会を頂きまして、これまで培って来た経験を最大限に活かして、あらゆる側面から学術振興に全力を尽くす所存です。



Pre-Departureセミナーで開会の挨拶をするセンター長

ロンドン研究連絡センターの副センター長を拝命しました佐藤大樹と申します。任期は本年9月末より2027年9月末までの予定です。着任前は、関西学院大学にて産官学連携研究プロジェクトの推進支援や、留学生の受け入れを中心とした国際化施策の企画推進に従事しておりました。

英国の高等教育と研究力は世界的に極めて高い水準を有し、世界中から留学生や研究者が集まっています。私自身は今回初めての渡英となりますが、日本でいう“国際化”の概念が意味をなさないほどに多様な構成員が英国社会を形成しているのを目の当たりにし、多様性と教育・研究力の間に好循環が定着しているのではと感じます。一方、当地においても移民に対する世論は二分されており、連日多くの報道がなされています。これらの背景を踏まえ、当センターの本分である日英間の学術交流促進に貢献すること、加えて、英国のエコシステムを参考に我が国の大学の“国際化”のあり方について見解を深めること、この二点を念頭に今後二年間の職務に取り組みたいと考えています。

プライベートでは、街を歩くとこれまでに読んだ小説や、映画の舞台に数多く出会い、毎回違った喜びや感動があります。すると、ロンドンを舞台にした作品を新たに探す楽しみも生まれ、文字通り世界が広がっていくような感覚を覚えます。

今後様々な機会を通じて皆様にお会いできることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

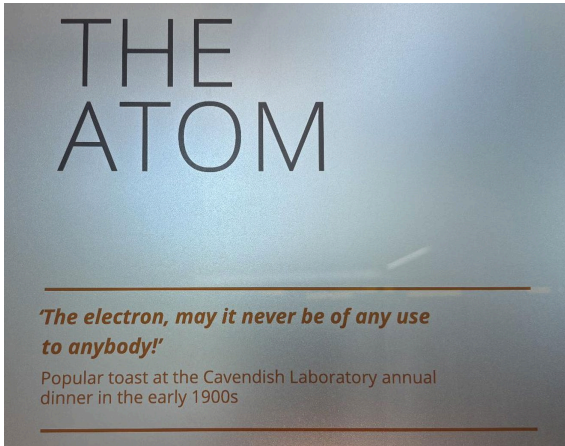


JSPS London 副センター長  
佐藤 大樹（関西学院大学）  
（2025年9月就任）

巻頭特集1

# センター長の英国雑記 “Trick of the Tail”

## 量子科学100年に想う 「電子よ、どうか誰の役にも立ちませんように」



キャベンディッシュ研究所の廊下に設置されたパネル

今年2025年は、国連総会が量子科学誕生100周年を記念して、ユネスコの「国際量子科学技術年」と宣言しました。科学技術に関係する組織は、その「国際量子科学技術年」にちなんで、多くのイベントを開催して来ました。例えば、理化学研究所のシンポジウムのアナウンスを見ると「波であり粒子でもある」「表でもあり裏でもある」「離れてても繋がってる」不思議な世界、と言われていますが、科学の根本が、文学的でもあり、芸術的でもありますが、非常に面白いポイントで、ここに科学技術のさらにこれからの100年につながるヒントが見え隠れする感じがします。

### 1)「量子科学100年」とは？

それでは、何を基準に100年と言っているのでしょうか？100年前に何があったのでしょうか？それは「全ての物質は原子から出来ている」という議論の始まりに遡ります。

1911年、マンチェスター大学にいたアーネスト・ラザフォードは、 $\alpha$ 線の散乱実験から、原子核を発見し、その周りに電子が飛び回る「原子模型」を発表しました。原子核と、その周りを飛び回る電子、というイメージは、我々は学校で習っているので、何となく分かる感じがしますが、誰も見たことがないので、そうなんだろうな、

と信じること、この辺までは、追いついていけそうです。そこで量子科学につながる展開は、そのラザフォードの「原子模型」では、電子が飛び回ってエネルギーを消費して、原子がすぐに壊れてしまうのではないか、という問題があったことに始まります。

その時、ラザフォードのもとで勉強をしていたニールス・ボーアは、その問題を、ドイツのマックス・プランクの量子仮説をもとに、1913年、デンマークのコペンハーゲン大学で、ボーアの原子模型として、原子が何故安定に存在するのか、という謎を解決する「前期量子論」を提案しました。(この辺りから、もう既について行けなくなりそうですが)

それでは、2011年とか2013年に「量子科学100年」が終わっているのではないかと思う節もありますが、ある意味「前期量子論」は仮説であったので、ここで歴史的に見ると、その後、1925年にコペンハーゲン大学でボーアに師事していたヴェルナー・ハイゼンベルグが「行列(マトリクス)力学」、翌年の1926年にスイスのチューリッヒ大学にいたエルヴィン・シュレディンガーが「波動力学」という異なる形式の数学を提示して、その2年後の1928年に、ケンブリッジ大学で博士号を得たばかりのポール・ディラックが、その「行列力学」と「波動力学」は、同じことを違う表現で言っている等価性を証明し「相対論的量子力学」としてまとめました。

この辺りから、もう全くついて行けなくなりましたが、そういう天才たちが「数学的な美」を求めていた英国～欧州の科学技術の源泉がここにあったと言える時代が100年前にあった、となり、そのハイゼンベルグが「行列力学」を提示した1925年を、量子科学元年としよう、となったようです。(余談ですが、その「数学的な美」を求めたという意味では、デカルトが運動の根源である位置を(x, y, z)と表した直交座標系に対して、回転や振動を記述するためにニュートンが角度を変数に持つ(r,  $\theta$ ,  $\phi$ )と言う極座標系を導入したが為に、 $F=ma$ という運動方程式を展開すると数式がごちゃごちゃになり「数学的に美しくなくなる」ということは「科学的に何か根源を

見逃しているのではないかと考え、ラグランジュとハミルトンが必然的に数式的な美しさを追求した解析力学を展開し、両氏が提案したラグランジアンとハミルトニアンは、ルジャンドル変換で同等に互換され、そのハミルトニアンは後に、量子科学で重要な役割を果たすとは思ってもよらなかったと言う、何だか分からなくてもその「数学的な美」を追求することが、如何に本質に迫るかを如実に表している、と私は大学の授業で主張して来ましたが、間違っていたらゴメンナサイです)

## 2)そもそも量子科学とは何か？

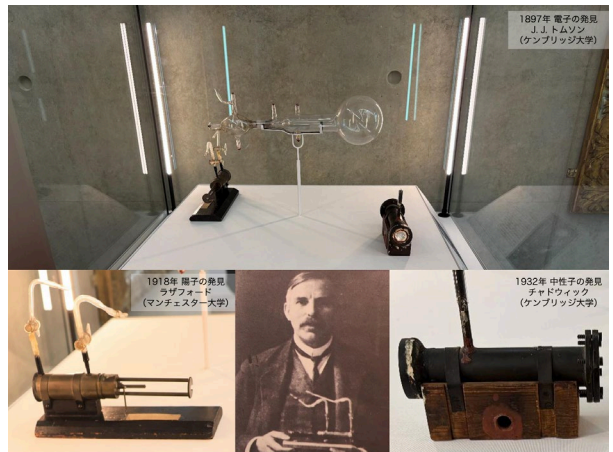
それでは、そもそも、量子科学とは、どのような内容なのでしょう？

私が大学の講義で「物理を専門としない」学生に、最初に説明した話は(物理を専門とする学生には怖くて話せませんが)誰も見たことがない、原子核とその周りを飛び回る電子というイメージの「原子模型」を「信じる」のであれば、もう少し「信じられない」非常に小さな世界で起こる、普通では考えられないルールに従う科学を考えてみよう、から始めました。

まずその「非常に小さな世界」が如何に小さいかを実感する為に、我々人間の身長が地球の直径くらいになったことを考えてみます。そうすると原子の直径はサッカーボールくらいの大きさになります。その中の原子核はボールの中にある砂粒よりも小さい塵くらいになります。(サッカーボールが東京ドームの大きさであれば、その中心に存在する原子核は、セカンドベースの上に乗った米粒よりも小さい存在になります)そうしますと、電子は雲のように広がっていますので(と教えられた我々は信じてやまない)サッカーボールの表面ないしは全体に漂う霧のようなもの、くらいまでは、その地球の大きさから比べて、その「小ささ」は何となく分かるような気がします。

そこで大切なのは、電子は1個なのに、雲のように、霧の水分子のように、広がって漂っている、というイメージです。1個なのに広がっている、まあ、小さな世界だから何が起きてても驚かない、それが量子科学です。

量子の世界は、1個の「粒」が、雲や霧のように広がっている、これを専門的には「波が広がっている」、つまり電子は、1個なのに、サッカーボールの表面全体に波として漂う「確率、存在する可能性がある」ということになります。



電子(上)陽子(左下)中性子(右下)を発見した実験装置と  
それを持つラザフォード(中央下)  
ケンブリッジ大学キャンベディッシュ研究所にて  
(撮影:田主裕一朗氏(仁科財団))

## 3)量子の奇妙な話を日常の比喻で

粒でもあり波でもある、を例えると、池に小石を投げたら、小石は「点」に落ちますけど、量子の世界では、小石が「水面の波」のように広がって落ちる場所がぼんやり決まることになります。つまり、落ちた位置、存在した位置は「決まっていなくて、確率的に広がっている」ことになります。これは何となく直感的に分かる気がします。

ところがさらに、普段の生活で見える物体は「動けば原因がある」「モノはモノとして存在している」「動きがあれば、連続的に動いていて、位置の(x, y, z)は曖昧ではない」という「古典的なルール」に従います。ところが、原子・電子・光子(光の粒)などは、それとは全く違うふるまいをする、その世界を議論するのが(私からすれば、そう信じるのが)量子科学(量子力学)と言えると思います。

量子の世界では、小石が「水面の波」のように広がって落ちる場所がぼんやり決まる。つまり位置(x, y, z)は決まっていなくて、曖昧に確率的に広がっている。これは、聞いたことがあるかと思いますが、量子科学の「不確定性原理」そのものだと言って良いと思います。

小さな世界では、モノの位置と動きを同時にハッキリ決めることができない、というのが量子科学の基本ルールです。そろそろ、そんなものかもしれない、と思えるようになるかもしれませんが、日常の例えで説明すると、真っ暗の部屋で小さな虫が飛んでいて、懐中

電灯で探そうとして、その暗い部屋で、小さい虫を見つけたとします。そのために強い光を当てると、光を当てた瞬間に虫が驚いて、逃げてしまって、位置は分かったけれど、動き(速さ)は分からなくなる、それでは薄暗い弱い光で探すと、虫はあまり動かないけれど、位置がぼんやりしてしまう、速さが特定されると、位置がぼんやりしてしまう。(ここでは走光性集光性の虫はムシしましょう)つまり、位置を正確に知ろうとすると、速度が乱れ、速度を正確に知ろうとすると、位置がぼやける、これが不確定性原理になります。我々人間は、ウサイン・ボルトがどんなに速く走っても、100m走のどこにいるかは分かります。これは、観客がどんなにボルトを見ても、ボルトにはほとんど影響がないからです。

ところが、量子はとても軽いので、その“観測”によって動きが乱れてしまう。その為に、位置と速度を同時に正確には測れない、となります。ものは「見る」ためには光などで探る必要がありますけど、人間とかボールとかボルトとかは重いので、大きいものに対しては観測の影響はほぼゼロという「古典力学」の世界ですが、電子・光子のような小さな粒ですと、観測の影響が無視できず「見る」こと自体が状態を変えてしまうために、不確定性が避けられないこととなります。

これは、1927年にボーアに師事したハイゼンベルグが提唱したもので、粒子の位置と運動量を決定しようとすると、決定精度、つまり誤差はゼロにならず、必ずマックス・プランクのプランク定数の $4\pi$ 分の1以上でしか決定できない、としています。何でプランク定数で、何で $4\pi$ 分の1なのかは、今から100年前の天才たちが考えたことですから、我々はその巨匠、巨人の肩の上に立っているしかない、と信じるしかないと思います。実はこれは、自然界そのもののルールでして、本当は、複数のことは「最初から同時には決まっていない」という量子の世界が集まって、我々のスケールの世界が出来ている、という、では、どの位の大きさから、曖昧な不確定性な状態ではなくなって、我々がいるのか、という疑問が生じますが、その辺りのことは正直、説明するには私もまだまだもっと勉強しなければいけないところかと思えますし、我々は曖昧な不確定性な存在であると思った方が気が楽になる感じかもしれません。(小心者の私は、人に見られると緊張してしまうという、ある意味、確かに不確定性原理が当てはまる世界にもいますが…)

#### 4)因果関係がはっきりしない世界

「動けば原因がある」「モノはモノとして存在している」という話を進める中で「シュレディンガーの猫」という話を聞いたことがあるかもしれません。これは「量子の性質を日常に持ち込むとおかしなことが起きる」という寓話です。科学の世界の教訓や教えが含まれたイソップ童話と思えば何故か納得出来る世界です。

量子の世界では、物事が「起きている」「起きていない」が重なった状態(重ね合わせ)が可能になっています。このルールを「量子の世界」という箱に猫を入れると、猫が生きているのか生きていないのか、猫がいるのかいないのか(入れたんだっいたらいるでしょ、ですけど)が外からは分からない、開けてみなければ分からない、という、専門家は、中の状態が「重なっている」というおかしな表現にして納得しています。

これは「量子のルールは人間の大きな世界にはそのまま適用できない」という思考実験で、サイコロをコップで振っている間は「1~6が全部重なった状態」で、コップをテーブルに伏せて、外した瞬間に「3です」と決まる、量子では、これが本当に物理的に起こっていることとなります。長嶋茂雄の3でなくてもいいですよ、と思う疑問こそが、量子科学の根底にあります。

一方で我々は「動けば必ず原因がある」という物理では古典的な世界の考え方を常としています。つまり、我々の日常は、物体は力がかかれば動く、原因があれば結果が起きる、同じ状況なら同じ未来が起きる、という「因果関係がはっきりした決定論的なスケールの世界」に在ると言えるでしょう。一方で、量子の世界では、結論から言うと「動き」や「結果」が、ひとつの原因だけで決まるとは限らない。むしろ「確率的に決まる」と考えます。でもそうすると、正確に考える科学よりも、量子科学の方が曖昧で、文学的で、芸術的で、人間的でもある、という堂々巡りが始まり、我々人間が見る、感じるスケールの世界に、人間は自ら文学、音楽、芸術などを、我々の根底にある量子の世界を再現、黄泉(よみ)がえりするかのよう、創作、創造して来たと、私は、あくまでも個人的に、思っています。

量子科学では「動き」は確率で決まる、すなわち電子などの量子の世界では、どっちへ動くか、どこに現れるかが、確率としてしか予測出来ず、同じ条件で同じ実験をしても、結果は毎回「少し違う」ので、雲のように、霧のように、ぼんやりとした存在としています。

沢山の粒を使うと、全体の振る舞いが徐々に見えて来て、大体は予測出来ますが、個々の「動き」については、決定的ではありません。小学校の校庭で、小学生が遊んで走り回っている一人一人の動きは予測不能ですが、小学校の校庭という中に存在していることは事実で、朝礼という放送が流れると、皆んな徐々に列を作って並び始める、でも一糸乱れぬ列にはならない、そんなイメージかと思います。(あくまでもイメージですけど)

さらに文学的かつ芸術的に量子科学を表現すると、原因と結果が「ゆるくつながっている」となります。量子科学では原因と結果が、1本の直線では結ばれず「原因から複数の可能性が枝分かれして、そのうちの1つが結果として観測される」という形になります。そして観測するまでは、明確な動きは分からない、とまあ、曖昧な表現こそが量子科学の真髄になります。人間関係にも似ていますね。

観測前はどこにあるか、どう動いているか、はっきりしない、観測すると、その瞬間に位置・状態が決まる、これを「波動関数の収縮」と言って、それらしい専門用語ですが、この言葉を考えた研究者のセンスはあつぱれですね。つまり、見ていない時の「動き」を、一本の軌道で表すことすら出来ないのです。

古典科学では、動きの決まり方は、ある原因で1つの結果が決まる「決定論」で、結果の予測は可能で、一方の量子科学では、原因はあるが結果は確率で決まる「確率論」なので、結果は確率の分布までしか予測できない、となって、我々人間の世界でも、結果は確率の分布までしか予測出来ないではないか、と考えると、もう量子科学的な考え方がだいが身近に感じるかもしれません。

ここで、面白いことに、古典科学的な我々の世界では、見ても見なくても物質はそこにある、見ても見なくても観測には関係なくモノは存在しています。ところが量子科学では、観測して初めてモノがそこにある状態が決まる、そんな世界が広がっている、という、これを文学者が書いたら、素晴らしい表現だと思うように、量子科学の内容は、最初に書きました、文学的でもあり、芸術的でもあることになり、哲学と自然学、そしてそれをつなぐ形而上学が一体となって議論をして来た原点回帰が見え隠れして来て、私はこれこそが、今から100年後まで続く科学技術のあり方の一つだと思えてなりません。

## 5)役に立たない科学を

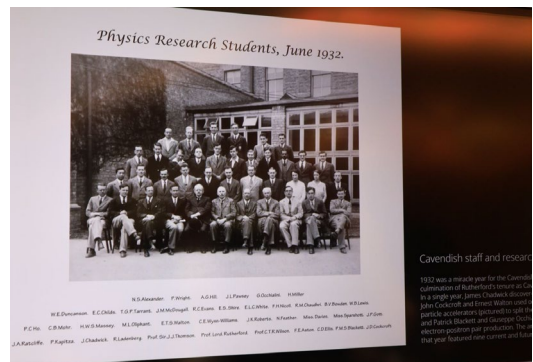
下の表を見て下さい。あえて項目の説明はつけませんでしたが、言わずもがな、英国の科学は、量子科学の大きな一躍を担っていた以上に、物質のモノとしての根源に迫る議論は英国に始まっています。特に、ケンブリッジのキャベンディッシュ研究所には(1921年に仁科芳雄博士(後に理化学研究所に研究室を持ち、湯川秀樹、朝永振一郎のノーベル賞、そして2004年の原子番号113番の元素ニホニウムの確認につながる)が日本人として初めて留学した研究所)その気運が現在に続いています。

原子(概念)	デモクリトス	紀元前5世紀頃	古代ギリシア
原子説	ジョン・ドルトン	1803	マンチェスター
電子	J. J. トムソン	1897	ケンブリッジ
原子核	アーネスト・ラザフォード	1911	マンチェスター
陽子	アーネスト・ラザフォード	1918	マンチェスター
中性子	ジェームズ・チャドウィック	1932	ケンブリッジ

### 量子科学の発見の歴史

ラザフォードは1919年にケンブリッジに移りキャベンディッシュ研究所長となり、1920年に中性子の存在を予言している

「電子よ、どうか誰の役にも立ちませんように」  
これは、発見された電子が純粋科学・基礎科学の象徴であり、実用化・応用を問わないで欲しい、という、キャベンディッシュ研究所の研究者の理想(と英国らしい皮肉とユーモア)を表したものとされています。  
「役に立たない科学」それこそが、100年先の社会に貢献する大切な科学である、という自負を持って、研究費の申請に、5年後10年後に何の役に立つかと書き続けた私は、密かに100年後の社会を思いながら書いていたとは誰にも言えない、そんな思いを汲む、そんな静かな願いを密かに未来に託すことの出来る「離れていても繋がっている」ファンディング・エージェンシーでありたい、と想う「量子科学100年」です。



キャベンディッシュ研究所の「奇跡の年」1932年の集合写真  
この中にノーベル賞受賞者が9名いる

巻頭特集2

# 英国サバイバルセミナー開催報告

## 在英日本人研究者を対象に 「第7回英国サバイバルセミナー」を開催しました！

2025年11月6日に、英国のアカデミアでサバイバルしたい、既にサバイバルしているのでその経験をシェアしたい、或いはキャリアに迷っている、全ての在英日本人研究者を対象として「英国サバイバルセミナー」を開催しました。当日は長年英国およびアイルランドで活躍されている先生方5名から、ご自身の経験に根ざした貴重なお話を多数いただき、約40名の参加者を得て大変盛況となりました。この特集では、当日交わされた数多くの議論から、ごく一部を抜粋してご紹介します。

### 1) 基調講演

基調講演では、University College London 教授・紅林秀和先生(Hidekazu Kurebayashi | Spintronics - UCL - University College London)をお招きして、ご自身の成功体験だけでなく、失敗談についても率直にお話をいただきました。

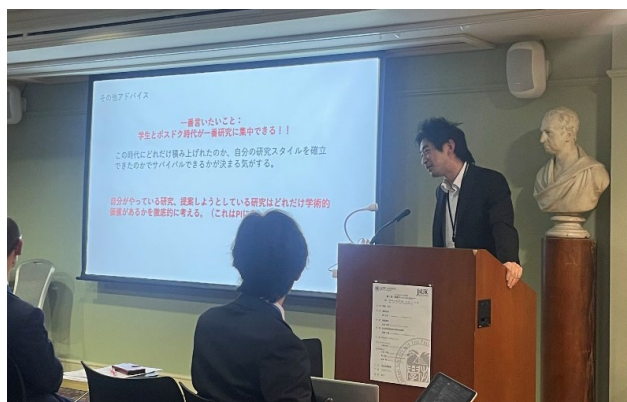
・ケンブリッジでのPhD学生時代の指導教官は放任主義で、日本との違いに大きなカルチャーショックを受けた。異なる環境に努力して適応した経験は財産となったが、反省点として、指導教官から与えられたものに疑問を感じず、自分の研究においてどのように世界で勝負するか？という点まで思考が及ばなかった。

・PhD取得後、納得のいく研究成果が出ていなかったことから2年間で成果がでなければアカデミアのキャリアを諦めると決めた。時間がかかる薄膜試料作成をやめて研究発案と測定に注力するなど、論文の生産性を重視して研究テーマを組み立てた。幸運にも良い成果が出始め、JST(科学技術振興機構)のさきがけ研究者に採択され、その後UCLにて研究室を主宰するチャンスに恵まれた。英国ではフェローシップを得たことに安心せず、フェローシップを梃子にして次の職を探すことが重要だと思う。英国でLecturerの職を得られるかは能力(研究力、基礎知識、頭の回転、研究費獲得力)の他に運(学部の将来構想とのマッチング)の要素も大きいのでリジェクトされることは多いが、粘り強くアタックすることが重要。

・多様な業務をこなさなければいけないPIに比べ、学生そしてポストドク時代が一番研究に集中できる。自分の研究の学術的価値を徹底的に考え、研究を深化させ、独自の研究ネットワークを構築して欲しい。

・研究室を立ち上げた直後は、研究する立場からしてもらう立場への転換が最も大きなチャレンジだった。最初は自身の経験から、放任主義的な研究指導をPhD学生にしたがうまく行かなかった。その後、小さい成功体験を得られやすいプロジェクトを与えながら、学生に自信とやる気が育つよう教育するシステムに変えたところ研究成果が出るようになった。

・キャリア全体を通じて、サバイブすることも重要であるが、仕事を通じて人生を楽しむことをもっと考えて欲しい。そのためには、自分のことをよく知って、何が好きなのか、何を楽しめるのかよく見つめることが必要だと思う。



紅林教授による基調講演の様子

### 2) パネルディスカッション

続いて、パネルディスカッションには次の4名の先生方をお招きして、多様な角度から英国・アカデミアでのキャリアについて論じていただきました。途中、参加者の皆さんを交えた質疑応答や、基調講演を担当された紅林教授からのインプットもあり、活発な議論が交わられました。

## [ファシリテーター]

小館 尚文 University College Dublin 准教授  
Naonori Kodate | [About](#) | [University College Dublin](#)

## [パネリスト]

小林 千晶 University of Hertfordshire 教授  
Chiaki Kobayashi - [University of Hertfordshire \(Research Profiles\)](#)

新 広記 University of Birmingham 准教授  
Dr Hiroki Shin - [Department of History - University of Birmingham](#)

越智 崇 University of Leeds 講師  
Dr Takashi Ochi | [Faculty of Biological Sciences | University of Leeds](#)

## ■ 英国に来た理由

(小林)女性研究者としては日本で仕事をするのはありえないと思っていた中で、英国の現大学で職を得たため。

(越智)私も、職を得たという要素が大きい。英国にきて、こちらのほうがファンドやフェローシップが充実していると感じる。また、子供の教育環境を考えても日本よりも英国の方が良いと思った。

(新)英国に残った理由として、配偶者のキャリアを考えると日本よりも英国のほうが圧倒的に待遇が良いことがあげられる。

(小館) イギリスでPhD、研究員をしていた時期は精神的に行きつ戻りつのおきもあったが、アイルランドでテニユア・ポジションを得た2014年以降、日本に帰らないと決めて宣言すると、日本からのポジションのオファーも減った。退路を断ち、プレッシャーをかける意味で良かったと思う。

## ■ 英国で採用される人材像

(小林)論文数、引用数が優れていることは基本。加えて、求められていることに端的に応えるコミュニケーション能力、教育、広報普及等、すべての要素が認められることで採用候補になっていく。

(越智)Leeds大学ではREFと同期して採用が動く。タイミングも重要。

(新)基本的に倍率は50~120倍なので、とても競争が厳しい。最近ではアメリカから大量に研究者が流入しているのもこの傾向に拍車をかけている。また、英国



パネルディスカッションの様子

ではResearchとTeachingの役割分担が進んでいるので、Teachingに注力しすぎるとResearcherに戻れない恐れがある。

(小館)アイルランド(UCD)では逆に、TeachingとResearchは分離させると二層化してしまうので、そうしないような制度になっている。また、待遇面に関して、力のある研究者には、長期滞在してほしいとの期待から、パートナーがアイリッシュであるかなどを見極めたうえで採用するなど生活面を安定させることで流出を防ごうとしている。

(新)英国でもパートナーと合わせて採用する制度がある。日本人は、職をいただく、といった意識なのであまり交渉しないが、ヨーロッパの研究者は採用されるときに強く主張する。日本人ももっとネゴシエーションして良いと思う。

## ■ 今後、ResearchとTeachingで大学ごとに棲み分けが進むのか

(小林)英国では学生及びその親から、教授から直接、基礎的な授業を受けたいとのニーズは強い。このため、棲み分けについては懐疑的。

(越智)Leeds大学ではResearchとTeachingのエフォートは半々。Researchをやっていないと最新の知見を取り入れられないので、Teachingの質が上がらないという考えが根底にあると思う。

(新)二極化は進むと思う。大学間だけでなく、大学内でも職によって棲み分けが進むと思う。

## ■ 研究費の獲得

(小林)英国では研究、教育、グラントが同じぐらい重視される。最初は中々採択されないが、自身の事例としては大きなグラント獲得や有力誌での論文掲載が昇

進と直結していた。

(越智)中々採択されないのはそのとおりで、最初は落ち込んだ。今では耐性ができて、一つ不採択の通知があってもすぐその場で次の申請を書き始めるというサイクルになっている。

(新)耐性をつけるのは大事だが、今でもリジェクトされたときはものすごく腹が立つ！このため、リジェクトされたものをどうリユースするか、という方向で考えるようにしてる。

(小館)社会科学の分野だと、昇進にあたりどのくらいのグラントが必要かという明確な閾値は無いが、EU各国のチームでコンソーシアムを組んでグラントを取っているという実績はとても重要。

### ■ 論文は数か質か？

(新)数よりも、目立った、多く引用されている論文があるかという点が重要ではないか。

(小林)どちらも大事だが、誇れる論文がどれか、なぜか、と答えられることも重要。

### ■ やってよかったこと、犠牲にしたこと

(越智)良かったことは、困難にチャレンジすること、良い論文を書くことだけではなく自分のビジョンを確立

すること。英語で申請書を書ける能力を養うのも必要。犠牲にしたものは、食、(周囲の)モラル、高品質なサービス...

(小林)藪に入って良かったと思う。藪＝難しいことに挑戦するのが好きな方ではあるが。そうして得たスキルが今になって評価されていると感じる。モラルに関しては、日本の方が無いのではと思うくらい、英国の方が私にはしっくり来る。

(新)若いときの失敗として、当時の指導教官から「人のプロジェクトで働く時間を減らせ、一日でも早く自分のプロジェクトを持て」と言われていたが、あまり言うことを聞かなかった。犠牲にしたものは、食！また、日本で培った人脈を残して来たのは大きな犠牲。

(小館)当初のキャリア目標を変えて、海外における研究職を目指したが、自分の性格をよく見つめたうえで、自ら選んだ道であることも意識して、好きなことをやった結果が今に繋がっていると思う。英語で文章を書く力も大切だったと思う。

(紅林)何かを犠牲にしたと思ったことは無い。環境の変化に適應して楽しみを見つけていくのが人生ではないか。

執筆者: JSPS London 副センター長 佐藤 大樹



# Pre-Departure Seminar 開催報告

## 2025年11月4日に開催したPre-Departure Seminarの様子を紹介します！

去る11月4日、今冬から渡日し研究活動を開始するフェローシップ採用者を対象とした「Pre-Departure Seminar」を開催しました。本セミナーは、JSPSフェローシップ事業を最大限に活用できるよう、また、日本での研究・日常生活をより充実したものとするため、日本語レッスン、日本の文化や生活のアドバイス、先輩フェローによる講演に加え、同窓会員を含むネットワーキングの機会を提供することを目的に、例年春・秋の年2回開催しているものです。当日は対面形式で実施され、18名のフェローが参加しました。

### ■ 日本語レッスン

セミナーに先立ち、Warwick大学から藤田朋子講師を迎えた日本語レッスンが行われました。レッスンでは、日本語の文字体系、挨拶や自己紹介などの基本的な表現、自身の研究分野の日本語表現等が丁寧に解説され、熱心にメモを取ったり積極的に質問をしたりする参加者の姿が見られました。随所に設けられたロールプレイは参加者同士のアイスブレイクにも一役買った様子で、レッスンは終始明るく活発な雰囲気でした。



日本語レッスンの様子

### ■ JSPSからのオリエンテーション

続いて、短い休憩を挟み、JSPSからのオリエンテーションを行いました。冒頭、原センター長による開会挨拶では、自身の経験をもとに、アーリーキャリアで培った海外とのつながりや研究経験がいかにかその後の研究

人生に大きな影響を及ぼすかが語られ、今回の渡日経験がフェロー一人ひとりにとって豊かな経験となるよう応援のメッセージが送られました。

ここで、参加者が簡単な自己紹介を行い、研究分野や所属、渡航予定先などを共有しました。異なる所属、研究分野の研究者同士が交流を深められることも、本セミナーの重要な意義の一つです。

続いて、佐藤副センター長から「Preparing for Your Research Trip」と題した説明が行われました。日本に到着してまず感じるであろう文化の違い、昨今の過酷な日本の夏とその対策方法などが紹介され、参加者は様々なリアクションを見せながら説明に聞き入っていました。

さらに、西田明日香国際協力員からはJSPS国際交流事業の紹介が行われました。フェローシップを含む各種事業がキャリアステージに沿って体系的に説明され、参加者が今後のキャリアで活用できるJSPSの事業への理解を深める機会となりました。

### ■ 先輩フェローによる実践的アドバイス： Keith Willison 教授

続いて、JSPSフェローシップ経験者のImperial College LondonのKeith Willison教授が「Experiences as a JSPS Fellow」と題して自身の長年にわたる日本との研究交流の軌跡を紹介しました。Willison教授は1980年



Keith Willison 教授による講演の様子

代から日本各地での研究経験があり、近年でも日本との関わりを積極的に深めてきた豊富な経験をお持ちです。

講演では、Willison教授の実体験に基づく日本での研究文化や生活のアドバイスが数多く共有されました。特に、初学者がまず習得すべき文字として「カタカナ」を推奨した点は印象的で、日常で多用される外来語の理解に直結する実践的な助言として紹介されました。また、通信・金融・交通といった生活インフラについて、携帯電話会社の選び方からキャッシュレス決済、ICカード利用、地域別の鉄道パスの活用法など、渡航直後から役立つ情報が具体的に示されました。

さらに教授は日本の研究現場で極めて重要な概念として「根回し」を挙げ、研究提案や議論を進める際に事前に関係者との対話を重ねておくことの重要性が説明されました。

## ■ 外部ファンディングエージェンシーからの事業紹介

講演の後、The Daiwa Anglo-Japanese Foundation の Ms Susan Meehan, Scholarships and Grants Officer、The Great Britain Sasakawa Foundation の Mr Charles Bodsworth, Chief Executiveから、両財団が提供する研究支援制度の紹介がありました。いずれの財団も、日英間の学術交流および文化交流を目的とした助成金を幅広く提供しており、短期の訪日研究から共同学術イベントまで、多様な支援メニューが紹介されました。フェローにとって、JSPSフェローシップ修了後の研究活動をさらに発展させる具体的な選択肢を知る機会となりました。

## ■ Question and Discussionセッション

すべてのプレゼンテーションの後、質疑応答の時間が設けられました。渡日が迫った参加者から実際的な質問が多く寄せられ、JSPSロンドンからの回答に参加者は真剣に耳を傾けていました。

## ■ Reception:先輩研究者との交流

オリエンテーション終了後、英国・アイルランドJSPS同窓会(UK & Ireland JSPS Alumni Association)のメンバーが加わるレセプションが開催されました。グループフォト撮影に続いて、同窓会会長であるCardiff大学の Andrew Quantock 教授から、同窓会の活動に関するショートプレゼンテーションが行われました。

会員数900名を超える同窓会には、BRIDGEフェローシップやシンポジウム開催支援事業など、参加者がフェローシップ修了後も日本との研究ネットワークを維持・発展させるのに役立つ事業が用意されています。英国・アイルランド各地の同窓会役員の紹介も行われ、今回のフェローシップ採用者の同窓会参加を大いに歓迎しました。

その後のレセプションでは、参加者と同窓会メンバー、JSPS関係者が一堂に会し、研究分野を超えた交流が活発に行われました。日本での研究生活への期待や不安を率直に語り合い、先輩研究者からの助言を受ける姿も多く見られ、温かな雰囲気の中で会は締めくくられました。



Andrew Quantock 教授による講演の様子

## ■ まとめ

これまで同様、今回のPre-Departure Seminarも、参加者は終始熱心に耳を傾け、質疑応答も活発に行われるなど、日本での新たな研究生活に向けた意欲の高さが伺えました。JSPSロンドンでは、今後もフェローの円滑な渡航と研究活動を支援し、日英間の学術交流をさらに促進してまいります。



参加者との集合写真

執筆者: JSPS London 西田 悠輔 (大阪公立大学)  
2025年度国際協力員として海外実務研修中

## 山田さんの徒然なるままに

～ JSPS London 現地職員が贈る、知られざる英国を様々な  
視点から語る痛快エッセイ ～



山田 泰子

2016年からJSPS Londonに勤務

### 第18回「Easier said than done」

この記事を書いている時期は、秋から大学生活を始めた新生が新しい生活にも慣れてきた頃であろう。新生歓迎行事も過ぎて、交際範囲も広がっている時期なのかと想像する。学生だけでなく一般人もこれから年末にかけてハロウィーン、ガイ・フォークスナイト、クリスマス、年末年始などイベントが多くなる時期でもある。

そんなイベントが多くなる季節に、BBC Newsでみた特集を思い出した。この時初めてAsk for Angelaというキャンペーンがあることを知った。これはパブやバーなどで自分の身に危険を感じたときにAngela というコードワードを使ってスタッフに助けが必要であることを知らせるものである。“Angela という人がここで働いていますか?”、“Angelaはいますか?” などAngelaというフレーズをスタッフに伝えることで、安全に助けを求められるという仕組みである。このキャンペーンは2016年にイングランド中東部のリンカンシャーで始まり、危険な状況にある人を「天使(Angel)」が助けるという意味を込めて名づけられた。特に女性のみを対象としているわけではなく、不安を感じた人であれば誰でも利用できる。BBCはその実態調査のため隠しカメラを使って潜入調査を実施した。しかしその結果は大変残念であった。対象となったパブ、バーの半数以上が適切な対応ができず、多くのスタッフはどうするべきなのかわからなかったという。

この事態を重く見たパブの大型チェーン店の一つであるJD Wetherspoonは必要に応じて追加研修をすることを発表している。

その後BBCは英国全土にある340の地方自治体の取材をしている。その結果34の自治体が新規の酒類販売免許の更新条件として“Ask for Angela”の実施を定めている。リーズ、ミドルズブラ、サウスエンド、ノッティンガムを含む67の自治体もこれに追随する可能性があることが分かったという。さらに47の自治体ではこの取り

組みが効果的に機能すると確認するため、パブやバーなどへの検査を積極的に行っている。また一部では安全対策を適切に運用できない業者は営業許可を取り消される可能性があるという警告している。

“Ask for Angela”を知らなくても、もしかしたら“Signal for Help”をご存じかもしれない。よくSNSのショート動画で見かけるものだ。助けを求める人に自分の手のひらに向けて、親指を手のひらに押し込み、残りの4本の指で親指を包むようにするものである。これはパブやバーなどだけではなく、あらゆる場面で有効である。SNSのショート動画では、飛行機の中、店やレストランの中、もしくはZOOMなどを使って、相手に危険を知らせる例を挙げている。誘拐された、家庭内暴力にあっているなど、声を出して助けを求められない時に使える仕組みとなっている。これは2020年コロナのロックダウンで自粛措置のため家庭内暴力の増加に対応するために考案されたものである。まずはカナダで導入されてその後世界に広がっていったという。“Ask for Angela”も世界で採用されているが、国により“Angela”ではなく店独自のコードが使用されているところもあるという。

GETTING UNWANTED ATTENTION, OR PEOPLE NOT TAKING 'NO' FOR AN ANSWER?

For discreet help, speak to a member of our team and **ASK FOR ANGELA**

They will know you need help and will get you out of the situation without fuss.

Supported by

SAFERSOUNDS PARTNERSHIP part of SaferBusinessNetwork

METROPOLITAN POLICE

ロンドン警視庁は「Ask for Angela」キャンペーンを積極的に支援しており、Welfare And Vulnerability Engagement (WAVE) TrainingをSafer Sounds Partnershipと提携している

出典: Safer Sounds Partnership Web ページ  
<https://www.saferounds.org.uk/wave-resource-download>

いずれの取り組みも大変良いものであり、女性だけでなく、立場的に弱かったりする人には大変効果的であると思う。しかしそう思うと同時に“Signal for Help”のサインを明日気づくのは私かもしれない。実際にどうすればいいのか、などと悩んでしまう。いきなり映画「Mission Impossible」の主演となり、スパイ活動の任務を命じられた気分である。“Signal for Help”キャンペーンをしている団体は“安全な方法でその人に「何が必要なのか」「何をしてほしいのか」を確認してください。”と呼び掛けている。これって「言うは易く行うは難し」ではないか。私はTom Cruise ではない。(ファンでもない)

先日、応急処置と火災の際の避難誘導の研修を受けた。大変有意義な時間であったが、簡単にパニックの私はこんな緊急時にどう気持ちを静めて対応できるのかと真剣に考えた。研修の時「自分が一番大切であり、応急処置や消火作業はできると判断したときのみ行うこと」といわれた。ハンドサインを出してきた人は思いっきり勇気を振り絞ってサインを出しているのかと思うと、なんとしてでも助けたい。しかし推奨されている“安全

な方法”などすぐに思い浮かばないであろう。きっと私にできる最善のことは、勇気を出して周囲の人を巻き込み、助けられる人を探すことなのだと思う。

Have a go hero (無謀なヒーロー)にはなりたくない。そのためにもこれらのキャンペーンが広く周知されることを願う。また読者の皆さんも自身の安全や安全な支援を常日頃から意識してほしい。

#### 【参考サイト】

- <https://www.bbc.co.uk/news/articles/c789nn3d918o>
- [https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_604f01e2c5b65bed87dc2006](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_604f01e2c5b65bed87dc2006)
- <https://www.morningadvertiser.co.uk/Article/2021/10/20/Do-people-actually-use-Ask-for-Angela/>
- <https://canadianwomen.org/signal-for-help/>



[signalforhelp.ca](https://signalforhelp.ca)



1) Open palm



2) Tuck thumb



3) Trap thumb

カナダの財団が、ジェンダーに基づく暴力(身体、心理、経済、社会的な暴力なども含む)の被害者が助けや介入を求めるために考案したハンドシグナル

出典: Canadian Women's Foundation Webサイト

<https://canadianwomen.org/signal-for-help/>

# ぼりーさんの英国玉手箱

～ ぼりーさんから聞く、英国のよもやま話 ～



西田 明日香(九州大学)

2025年度国際協力員としてJSPS London  
にて海外実務研修中



Polly Watson

JSPS Londonのローカルスタッフ。  
本コラムを通じ、英国の魅力をお伝え  
できれば嬉しいです。

## 英国のアフタヌーンティー文化 について教えてください！

今回のぼりーさんの英国玉手箱は、最近日本でも人気が高い「アフタヌーンティー」文化について、英国在住のぼりーさんをはじめ、現地職員の山田さんへ4月から着任した国際協力員・西田がインタビュー形式でお話を聞いてみました。

### ■ アフタヌーンティーの始まりについて

その歴史は1840年頃に遡ります。ベッドフォード公爵夫人アンナ・マリア・ラッセルが、夕食までの空腹を満たすために紅茶と軽食を楽しんだことがきっかけでした。当時、夕食は夜8時頃と遅く、午後の空腹を癒すこの習慣は瞬く間に上流階級の社交イベントへと発展しました。1865年にはロンドンのランガムホテルが初めてアフタヌーンティーメニューを提供しその後文化として定着しました。

アフタヌーンティーは、ホテルのティールームやレストランではもちろん、カジュアルなものではパブでも楽しむことができます。一般的な提供時間は午後3時～午後5時頃ですが、これは場所によっても異なるようです。

### ■ アフタヌーンティーで提供されるメニューについて

アフタヌーンティーの魅力は、三段のティースタンドにあります。

- ・上段: ケーキやパストリーの甘い誘惑
- ・中段: スコーン
- ・下段: サンドイッチやキッシュなどのセイボリー

量はたっぷりあります。食べきれない場合は持ち帰りも可能です。また、たりない場合は、おかわりがサーブされることもあります。

スコーンの食べ方についてクリームを先にぬるDevon派か、ジャムを先にぬるCornwall派か、という論争が起こることもありますが、これは好みの問題です。

### ■ 現代のアフタヌーンティーについて

かつては上流階級の特権だったこの文化も、今では誰もが楽しめるものになりました。高級ホテルでの優雅な体験から、パブでのカジュアルなティータイムまで、スタイルは多様化しています。価格はホテルで£30～50、パブなら£20程度。コロナ禍以降はテイクアウトやデリバリーも登場しました。利用シーンも変化しています。記念日や母の日、卒業祝い、Hen party(花嫁を中心とした女性だけのパーティー)、さらにはSNS映えを狙った女子会まで様々です。ギフト券やチャリティー抽選の景品としても人気です。

### ■ 紅茶と地域の個性について

紅茶はリーフティーで、上質な茶器とともに提供されるのが基本です。最近ではルイボ스티ーなど選択肢も広がっています。地域によっては、ウェールズでWelsh cakesやBara Brith(ティーブレッド)が登場することもあります。

### ■ 日本での昨今のアフタヌーンティーブームについて (西田国際協力員より)

近年、日本でもアフタヌーンティーがブームに。「ヌン活」という言葉が流行語大賞にノミネートされたほどです。キャラクターコラボや写真映えするメニューが若い世代に人気です。ホテルでは英国式に近いスタイルのアフタヌーンティーを楽しめますが、ポップアップストアでは紅茶にティーバッグが使われることもあり千差万別です。抹茶や和素材をテーマにしたメニューも登場し、英国と日本の文化が融合しています。

### ■ 最後に

アフタヌーンティーは、英国の伝統文化でありながら、現代では観光・記念日・SNS映えなど多様な目的で楽しまれています。紅茶とスイーツに囲まれた午後のひとときは今も昔も変わらず、特別な時間を演出してくれるのです。

# JSPS London Recent Events

## Events from April to December 2025

### ■ Organised Event

- Pre-Departure Seminar (Spring) - 23rd April
- Pre-Departure Seminar (Autumn) - 4th November
- 第7回英国サバイバルセミナー（JBUK在英日本人研究者交流会） - 6th November

### ■ Supported Event

JSPS London Symposium & Seminar Scheme

UK-Japan Seminar: Integrating Biological Sciences and AI  
for Next-Generation Immunotherapy

@ Imperial College London (22nd July 2025)

UK-Japan Seminar: Interactive theorem prover + Generative AI in maths  
seminar 2025

@ University of Exeter (17th September 2025)

UK-Japan Seminar: Chalcogenide nanoelectronics and photonics:  
a vehicle for collaboration and exchanges between Birmingham  
and Japan

@ University of Birmingham (28th - 30th September 2025)

Ireland-Japan Seminar: Caring Communities in Japan and Ireland  
collaboration, engagement and intergeneration relations  
for realising Ageing in Place

@ University College Dublin (28th - 29th October 2025)

### ■ Information Event/Session

- University of Birmingham, 4th April  
(University of Birmingham/WPI-SKCM<sup>2</sup> Joint Symposium Afternoon Session)
- Xjenza Malta (Online), 6th May
- University of Leeds, 7th May
- Durham University, 8th May  
(RENKEI Just Transitions to a Net Zero World Workshop)
- 日本人研究者交流会 in the Netherlands (Online), 14th May
- University of Warwick, 15th May
- University of Edinburgh, 30th June (UK-Japan Workshop on Nonlinear PDEs)
- London School of Hygiene & Tropical Medicine, 3rd July  
(Celebrating Impact and Shaping the Future: The NU-LSHTM Partnership)
- University of Sheffield (Online), 4th July
- University of East Anglia, 10th July
- University of Essex, 17th September (1st Mind Machine Symbiosis Day)
- Durham University (Online), 24th September  
(RENKEI UK-Japan research funder webinar)
- University of St. Andrews (Online), 14th October
- Manchester Metropolitan University, 19th November

# Programme Contact Information List

## Fellowship Programmes

### ■ Summer Programme

[JSPS London](#)

### ■ Postdoctoral Standard

[JSPS Tokyo](#)  
[The Royal Society](#)  
[The British Academy](#)

### ■ Invitational Fellowships

[JSPS Tokyo](#)

### ■ Pre/Postdoctoral Short Term

[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

### ■ BRIDGE Fellowship

[JSPS London](#)

## International Collaborations

### ■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme

[JSPS London](#)

### ■ Bilateral Programme

[JSPS Tokyo](#)

### ■ Core to Core Programme

[JSPS Tokyo](#)

### ■ JSPS International Joint Research Programme

[JSPS Tokyo](#)

## Follow us on ...

- For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者(ポストドク・大学院生含む)及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>

- JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly(学振便り)は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです(日本語のみ/購読無料)。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>

- JSPS Londonでは、Facebookページを通して公募案内や活動報告を発信しています。詳しくは、以下からご確認ください。

<https://www.facebook.com/jsps.org/>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター(JSPS London)  
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom  
Tel : +44 (0)20 7255 4660  
E-mail : [lon-info@overseas.jsps.go.jp](mailto:lon-info@overseas.jsps.go.jp) | <https://www.jsps.org>



JSPS London NEWSLETTER  
監 修 : 原 正彦  
編 集 長 : 佐藤 大樹  
編 集 担 当 : 西田 明日香